

【それでもなくてはならない存在、その名は父！】

説教者: 李淑英先生

聖書: エペソ人への手紙6:1-4、3:14-19 暗唱: エペソ3:14-16



先週は子どもの祝福の主日を迎え、子どもたちと楽しく遊ぶ時間を持たせていただきました。親としての仕事は尽きないものですが、いまのうちに子どもたちと接する時間を少しでも作って行きたいと思いました。今日は父の日の感謝の礼拝として主にささげています。

自分にとっての父はどんな人だったのか？父と言う存在についてメッセージを準備しながらもう一度父たちに感謝の思いと、励ましの言葉を伝えたいと思いました。

ある先生が書いた本にこのような話があります。“職場から家に帰ってきた。もう夏である。湿気も高く、体は重たく、汗臭いのである。ベルを鳴らしながら、自分を歓迎してくる妻と子どもたちを描いてみるが、みんなそれぞれの鍵が持たされているので、自分で開けてはいるのが今日はなぜかいやになるのだ。疲れ果てた心と体をもって家に帰ってきた。“パパ、帰ってきたよ”という自分の声が空しく空中に飛んでいく。。妻は顔も見ずに“お帰り。早く洗ってご飯食べて流し台にお皿は入れてね。”と言いながら台所に行ってしまう。“おれが下宿生かよ？家族のために一日中働いて疲れ果てて帰ってきたのに、ちょっとくらいは歓迎してくれよ”という思いで、自分が情けなくなるのだ。子どもたちはどこにいるのか？”と聞くと妻は“部屋で勉強してるんじゃない？”と無愛想に答える。“勉強、勉強、父が帰って来ても挨拶すらできない子達に勉強なんかさせるもんか？”と思いつつ自分の寂しさを堪えながら子どもたちの部屋をのぞいて声をかけてみる“勉強してるのか？”子どもたちは“はい。お帰り！”短く答えてまた自分のやっていることに入ってしまう。子どもたちのうしろに向かって“はい、頑張ってるな”と答えた。ほか交わす言葉がなかったからである。自分だけの食卓，“私と子どもたちは先に食べたよ。”と言ってはドラマにはまってしまう妻、自分の男には興味ないでありながらモムちゃん、ハンサムな男にはつばをだらしながら見ている妻、“これがいったい幸せな家庭生活なんだろうか？”いろんな複雑な考えが頭の中でぐるぐる！いつの間にかに、生活のパターンになってしまった自分の日常生活。タメ息をつきながら“人生とはそんなもんですよ”と言ってた会社の同僚の顔が思い浮かんでくる。これがまさに自分の人生の行く道なのか？なさけない自分がいやになってきた。”

これは現代の父たちの気持ちを良く表したのではないかと思います。いまの時代は共働きで奥さんも働いているせいなのか、家の頭としての権威もなく、給料も少ない無能力な父だけがいるような感じです。

私の親についてすこし分かち合わせてください。

私は母と一緒に飲食店を経営していた父をみながらいつも父の無能力さに腹をたてていました。いつも母にさげすまれ、家の頭としての力はまったく発揮出来ず、いつもは借りてきた猫みたいな父が、急にお酒が入ると、私たちにその怒りの爆弾が落ちていました。ちょうど、思春期の私はたいへん親に反抗していました。学校では学級員をしながらも、友達と授業をさぼったり、私立だった女子高で財団の力で先生たちを辞めさせる悪さに腹を立てて、自分の指先を切って血の手紙を書いてデモを扇動した事など、次、何をするかわからないほど自分勝手な思春期、もしくは反抗娘でした。いろいろと悪いことをしたことによって、学校になぜか親代わりにお祖父ちゃんが呼び出されたり、どんなにお母さんがむちでたたいてもあまり聞かなかった頑固娘でした。それにしても父は私のことを心配してくれたり、一人でひそひそと娘のことを心配していた覚えがあります。その中で、友達に誘われて教会に通い始めました。教会に行ってはいけないと猛反対していた親にばれてしまい、聖歌も、聖書も全部やぶられ、殴られながらもなぜか、これだけは親に従うことはできないと思いました。なぜ、自分は教会の執事たちのようにクリスチャンホームで生まれなかったんだろう。いまの親は本当にいやだ。いろんな思いをしながらも、すこしずつ教会の教えに従っていくようになりました。大人になって一ヶ月間海外に出かけたとき、ふっとパパの存在について考えた時があります。無能力で、いつもママに叱られるパパだけど、それにしても私はパパの遺伝子を持って生まれたのではないのか？神様は私の気質を良く知った上でパパとママの娘として生まれさせてくださったのではないのか？それでパパに長い手紙を書いて送りました。愛するパパの存在に感謝し、私たち家族のために生きていて下さって感謝、元気に生きていて下さって感謝、ママだけを愛し、私たち兄弟をも愛して下さって感謝。などの感謝の気持ちを表すその手紙でした。

その手紙を読みながら父は密かに泣いたそうです。実は見た目は強く見えても心は本当に繊細な方だったのです。いまは母も父がいてくれるだけでも感謝だと言っています。どんなに無能力な父であっても神様が家の頭として立たせて下さっているのです、いまは感謝の気持ちでいっぱいです。

みなさんの自分の父への思いはどうでしょうか？

以前はキリスト教は先祖知らずの宗教だと聞いていました。しかし、聖書を知れば知るほど、神様は目に見えている自分の親、目上の人々を敬うことこそがどんなにすばらしい祝福であるのか教えて下さっているのを聞きながら決して先祖知らずの宗教ではない事がわかりました。

たしかに、お母さんたちへの一般的記憶は献身的、無条件的愛などが思い浮かびます。しかし、父たちは面倒な存在、孤独な存在、隠れた存在、臭い、怖い存在など否定的な用語ばかりが思い浮かんできます。しかし、それにしてもなくてはならない存在には違いありません。

我が家もいま先週からパパがいないので、子どもたちも不安そうに夜を迎えたり、パパがいないと寂しいねと言っています。実際に様々な面においてひとりで全部やらなければならない苦労がありますが、なによりも心の支えになるべき存在がないことが一番の大変さではないかと思います。

しばらく今日の聖書の本文を考えてみたいと思います。

6章1節はまず子どもたちに向かって親に従うようにと命じられています。神様は子どもたちが親に従うことを願っておられます。そ

れが正しいからです。そして2節では言い換えて繰り返されています。“あなたの父と母を敬え。”従うことは行動であって、敬うことは心の姿勢を意味します。親を敬いなさいという戒めは祝福の約束がともなう命令です。その祝福は何ですか？3節です。そうしたらあなたはしあわせになり、地上で長生きする。親を敬うことはただの長生きの祝福が与えられることではありません。自分だけではなく自分の家庭がうまく行き、その子孫にまで繁栄していくのです。これはクリスチャンでない家庭においても親を敬う子どもたちは祝福される事を見る事ができます。神様が望んでおられるとおりに生きると信じない人々にでもその祝福はついて来ます。そして、4節で、父たちよ。あなたがたも、子どもを怒らせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。母にではなく、父たちよ。と呼びかけていますが、これは当時子どもの養育が父の責任の下で託されていたからです。現代の父たちは忙しさのあまり、すべて家のこと、子どもたちのことを妻に任せきりになっていますが、実際の責任は父に託されています。時間的に、精神的に子どもたちまで考えられないにしてもなんらかの形で父たちは子どもたちといまのうちに接していかなければならないと思います。

親に対して使徒パウロはするべきことと、してはいけないことを命じています。

まずしてはいけないことは子どもを怒らせてはいけないことです。するべきことは主の教育と訓戒によって育てることです。ローマの時代は親の権限で子どもたちを殺すことも可能だったそうです。それに対照的に使徒パウロは子どもの人格を大切にしているのがわかります。親が子どもを怒らせる要因には、あまりにも厳しいしつけや、暴力、えこひいき、過保護、無関心などをあげることができます。これはいまの時代、青少年たちの問題の要因にもなっています。これに積極的な面において主の教育と訓戒によって育てるようにと進めています。ただのむちではなく主の教育と訓戒によります。これは子ども自身が主の教えに基づいて何が正しいのか、分かるようにさせることだと思います。自分の教育と訓戒によってではなく御言葉による主の教えを教えるのです。各家庭には厳しい母がいれば、厳しい父がいます。どちらか厳しくしないといけないと思いますが、もし母が厳しいのであれば、父は励ます役として家庭を和ませれば家庭は円満にいけないと思います。

もし父が厳しいのであれば、反対に母が励ます役になればいいと思いますが、この時、あまりにも厳しすぎると子どもたちは親に対して恐怖感を抱くこともあり、いつかはかならず子どもたちも大きくなりますので、その反動が出てくると思います。うるさ過ぎると、これもまたうっとしがるでしょう。私たち親も当然人間ですので、先のことは考えず、自分の感情や目の前に置かれていることを先走ってしまいがちですが、だからこそ、毎日主の御言葉にしっかりと立って、いまこの場にイエス様がおられるならどうなされるのか？という心構えでいなければ、すぐ世の価値観と人間的な教えになってしまうと思います。

それと夫婦がまず同じ思いでなければ、これも子どもたちの教育に大きく混乱させてしまいがちです。いまの時代は夫婦が共に働いているので妻の声も大きくなってきて、主人と合わなかったら、いつか離婚しても良いと言う考えがどこかにある気がします。特に離婚の理由の一つは子どもの教育において価値観が違うこともかなり大きく占めています。それに対して、まずクリスチャン同士じゃなければ、かなり乗り越えられないところもあるでしょう。

もちろんクリスチャン同士であっても、価値観や意見の違いなどもあるはずですが、しかし、これは夫婦が家の頭なる神様に祈りをもって修正するなりに解決できるものだと思います。

妻として、私も主人にかなりきつく言ったり、口論する時もありますが、最終的な決定権は主人にあることを認め、主人を立てるように心はかけてはいますが、なかなかそれができない時もある、自分と戦っています。

父たちもなかなか家で自分の居場所がなく、寂しさを感じる時もあると思います。奥さんたちは奥さんたちなりに悩みを抱えていると思いますが、その夫の気持ちや苦労などを少しは受け止め、やさしく接するように心かけましょう！特に、子どもたちの前でパパを見下げたり、無視する言葉遣いなど気をつけるべきでしょう。

最後に教会の父たちをお願いしたいと思います。

みなさんはそれぞれの家庭でかしらとして任命されたお父さん、そして夫たちです。

任命された者らしく、子どもたちや妻に尊敬されるのにふさわしく言葉や行動、さらに信仰のリーダーとしていてほしいです。

子どもたちにただ敬いなさいと押し付ける前にまず大人として、お父さんらしく振舞って下さい。子どもたちは父と母を敬い、妻は夫を尊敬し、夫も子どもの前で妻を見下げないで尊重し、言葉などに気をつけていきます。これは一般的この世でも追いつめられている家の秩序ですが、さらに私たちは大いなる家庭の頭なる神様を信じています。すべての家の決定権を主にゆだねて、これらの秩序を守っていけば、きっと健全なクリスチャン家庭として大いに用いられると信じます。

いまのパパたちの間違った行動や生活によって、天地万物を造られた私たちの天の父なる神様が歪曲されないように成長していきます。けれども、どんなに足りない、弱い存在であっても、それでもパパたち。みなさんの存在は大切です。きっとみなさんの子どもたちも、奥さんたちもそう思っていると思います。

最後に今日の聖書箇所であるエペソ人への手紙3:14-19を読んでみましょうか。

“こういうわけで、私はひざをかがめて、天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてください。こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに、住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知る事ができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように”

家族と呼ばれるすべてのものの名の元なる父なる神様が私たちの家庭内の父として治めておられることを覚えましょう。そして子どもたちは目に見える父を与えて下さった神様に感謝しながら父たちを尊敬し、敬っていきますように。父たちも主から与えられた愛の権威者としてしっかりと信仰にたち、家庭を治め、父なる主の栄光のためにこれからも用いられていきますよう主イエスキリストの御名によってお願いし、祝福します。